

ジオパーク（Geoparks）設立に関する活動が内外で活発化しています。ヨーロッパや中国などを中心に、ユネスコに支援された世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network）が認証する世界ジオパーク（Global Geoparks）が既に 17 カ国の 53 地域に設置されています。ジオパークの目的や意義を鑑みると我が国においても設置が必要となりますが、それには、まず、日本におけるジオパークの意義を確認し、そのコンセプト（基本概念）を皆で議論し、明確にしておくことが大切です。

21 世紀は“ジオ（GEO）”の時代です。これからの地域づくりは“ジオ（GEO）”を強く意識した「人づくり」であり「場づくり」でなければなりません。“ジオ（GEO）”とは単に地質や地形のみならずそれを土台として密接に影響し合いながら存在し、変遷していく自然と人間を一体として捉えようとする新しい概念です。この“ジオ（GEO）”の概念のもとで、地域の優れた自然と人々の歴史や伝統・文化を素材とし、地域の固有性・独自性を主張する鮮烈なテーマを掲げて、今ある時・空を超えて宇宙と人類、自然と人間の歴史や文明とのかかわりについて、地質を中心にありのままの地域資源をビジュアルに演出した「場」がジオパークです。我が国では地方の人口減少になかなか歯止めがかかりません。地域崩壊が始まっていると言ってもよいかも知れません。一方、地球規模での資源・エネルギー枯渇、環境汚染、地域間格差が加速しているように、市場経済に象徴される物質文明のいき詰まりは明らかです。持続可能な生き方を採るべき我が国にとって、地方や中山間地にこそ、再出発すべき日本の原点となる自然や伝統思想や文化が“ジオ（GEO）”の構造をなして温存されているのです。

我が国の未来のために、何としてでもこれからの日本の原点となるべき地方や中山間地を守り、過疎化に歯止めをかけなければなりません。そのためには、結局、地域住民自身が立ち上がるしかありません。問題は「人づくり」であり「場づくり」です。その最も有力な手段がジオパークであると考えています。もちろん「人づくり」、「場づくり」は都市域にも通じる問題であることは言うまでもありません。ジオパークは、地域そのものが素材であり題材であり、地域住民自体が脚本家であり演出家です。総てありのままの地域が主役という意味でジオパークは一つの究極の活性化手法です。多様な自然と歴史・文化に恵まれた我が国においては、地方や中山間地はもとより各地のジオパークは、それぞれの地域が、地質を中心に、地球とか環境とか歴史とかを意識しながらも、地域特性を活かした市民公園として、いろいろと構想すればよいと考えています。地域住民の自由な取り組みと言うものがないと、面白くて奥の深い地域づくりはできません。

ジオパークは、もちろんユネスコに支援された世界ジオパークから、国立レベルのもの、都道府県レベルのものもあって良いし、市町村レベルのもの、地区レベルのものもあって良いと考えています。否、そうあるべきです。今、政府は VJC（ビジット・ジャパン・キャンペーン）を掲げて外国人観光客 1,000 万人／年を目標にがんばっていますが、目標としてはこれでも少ないと考えています。全国各地にジオパークが展開できれば、目標 1,000 万人を遙かに超えることも決して夢ではないでしょう。

日本は「文化観光」にもっともっと力を入れていかなければなりません。「文化観光」の最も重要な企てが“ジオ（GEO）”の概念を抛りどころとするジオパークであると考えています。内外からできるだけ多くの観光客に来てもらうためには、訪れる人々に、これからの生き方に重大な示唆を与えうると言うか、これからの新しい文明を創造するために役立つと言うか、そして、唯一日本のそして世界のその地域にしか存在しないとか、そう言った文化的価値と希少性の高いものを整備する必要があります。

日本ジオパーク・モデル化研究会は、地域の固有性・独自性に基づいた我が国にふさわしい日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を構想し、具体化していくことを目標にしています。本研究会では、ジオパークを幅広く、地質・地形・地理・生態・環境・人類史・考古学および地方史・民俗文化など、自然科学から人文・社会科学にいたる学際的な視点から俯瞰し、その中で地域に独自の「ジオパーク・モデル」を構想し、その具体化を図る上で不可欠となる「日本らしい

ジオパークのありように関する一定の考え方や手法を明確化して、日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を創発する」ための研究活動を開始しました。そのためには、行政・政界、業界・財界、学界など、あらゆる団体・組織の多くの人々との懇談・対話を通じて、広く見識を衆議することが大切と考えています。

さらに、地域の持続的発展に寄与し、内外の人々に受け入れられる日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の設置に向けた合意形成と制度設計を行う必要があります。そのためには、日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）について、①政策提言に止まらず、②議員連盟の組成、ならびに③『ジオパーク新法（仮称）』を視野に入れた国民的運動を展開していく必要があります。合わせて各層向け、マスコミ向け出版物などの上程、各種研究集会や広報活動を展開して、もって我が国固有の日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を内外に発信することが必要です。

21世紀を迎え、人類は資源・エネルギー枯渇や環境破壊など“地球と人間のかかわり”を根源とした深刻な問題に直面し、人々は地球に関心を寄せるようになりました。例えば、世界遺産も地学的観点から注目されることが多くなってきました。我が国では次の候補である小笠原が気になるのですが、ここでは Boninites（無人岩と言う小笠原諸島の古い呼称に因んだ学名）と呼ばれる独特・固有の岩石に象徴されるジオテクニクスの地学条件がその決め手になるのではと考えられています。さらには、 Biodiversity depends on Geodiversity（地球環境多様性が生物多様性を決める）の言葉に表れるように、人間活動にかかわる気候変動や自然破壊など地球環境問題への理解は“ジオ（GEO）”の視点を欠くことができません。

日本ジオパーク・モデル化研究会は当面、ジオパーク設立に向けた具体的活動を展開していく過程において検討すべき諸問題・課題について、地域の人々や自治体をはじめ関係する多くの方々と語る場を早期に創設したい、そのためのモデル事業をどんどん増やしたいと思っています。皆様のご理解とご支援、さらには積極的なご参加やご意見を期待しています。

